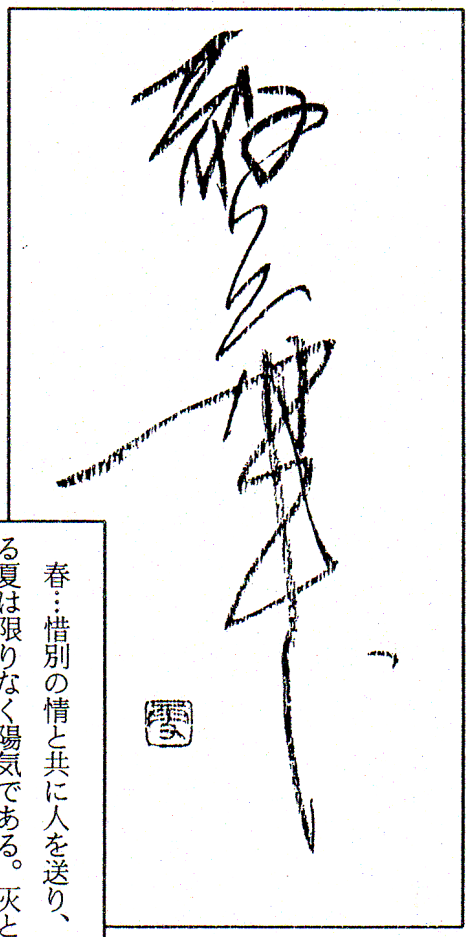

第10号に寄せて

小竹光夫

春…惜別の情と共に人を送り、また新しき人を迎える。様々に心動く季節を経て、迎える夏は限りなく陽気である。灰と青の空は独特のリズムを奏で、花は雨に歌う…。

昨春、私が社に来るにあたって、A先生は、姫路・加古川、そして中国自動車道からと様々な道順を教えて下さった。私は、その中から「自動車道を降りたら一本道…」を選択し、この地に到達した。別の道を辿れば、そこにはまた別の『風景』があったかもしれない。しかし、私はこの一本道の『風景』の中から、新しい生活をスタートした。今、時・所を同じくして生活する多くの人々も、かつて色とりどりの『風景』を通り抜け、この地に至ったことであろう。

目には同一に見える事象も、人それぞれの経由した『風景』によって、イメージは多様に変化する。イメージを書き起こし、文字化するということは、各人の根底にある『なにもの』かを、再び自らに問う行為でもあろう。10号を数える『求心遠心』は、そんな各人の、かすかではあるが確実な呟きを秘めている。